

第七回 官渡に戦かんといて本初敗績ほんしよはいせきし、烏巢うそうを劫おそつて孟徳糧りようを焼く

— 官渡の戦い —

○前回から今回まで

関羽は「白馬の戦い」で、袁紹配下の大将顔良がんりようを斬り殺し、これを置き土産みやげに劉備のもとへ向かっています。このとき劉備は袁紹のもとに身を寄せていました。

前回は、「悪役」曹操の魅力ある一面が描かれました。『三国志演義』は、曹操を単なる悪役一辺倒ではなく、その度量の大きさもあわせて随所ずいしよに描きます。また、今回紹介する、どこまでが本気でどこまでが演技かわからないような破天荒はてんこうさも、曹操の魅力の一つです。

さて、通行手形を持たない関羽は、途中、五か所の関所せきしよで行く手を阻はばむ六人の大将を斬り殺し、ひたすら劉備のもとに向かいます。曹操は張遼をつかわし、これ以上関羽の行く手を遮さえぎつてはならないと命じます（「千里単騎せんりたんきを走らせ五関ごかんに六将を斬る」）。ここも『三国志演義』のフィクションですが、関羽の名場面になっています。

その後紆余曲折うよまげくせつはありましたが、劉備・関羽・張飛は無事めぐりあい、そこへ劉備を慕慕つてやって来た趙雲も合流して、勢力回復を図ろうとします。

一方、曹操は、このあと「官渡の戦い」で華北の支配をかけて袁紹と対決します。袁紹は、四代続いて三公（後漢ごかんの最高官の三つの大臣）を出した名門の出身であり、軍事力も曹操よりはるかにまさっていました。『三国志演義』では、袁紹軍七〇万に対して曹操軍七万とします。

圧倒的に有利な袁紹軍ですが、曹操は悠然と「袁紹は志は大きいが知恵は浅く、顔つきはただけ猛々しいが胆は小さく、人を妬んでこれに勝とうとするが威厳いげんに欠ける。兵数は多いものけじめが明らかでなく、将は驕おごって政令に一貫性がない。土地は広く、糧食は豊かだといっても、私への捧げものになるだけだ」と言い放ちます。この臆おくさなない曹操の姿を、劣勢ながらも部下たちは頼もしくながめます。

いっぽう、袁紹側は対曹操の戦略について、なかなか意見がまとまりません。沮授そしゅと田豊でんほうは持久戦を主張し、郭図かくとと審配しんぱいは短期決戦を主張します。袁紹は結局、短期決戦を採用しますが、あくまでも持久戦をまげなかつた田豊を投獄してしまいます。曹操とは対照的な、狭量きょうりょうな袁紹の性格を描きます。

曹操は、前哨戦の「白馬の戦い」では陽動作戦を使い、奇襲に成功して勝ちますが、袁紹

軍は大軍にものをいわせて曹操軍を圧迫したので、曹操は官渡の砦に引きあげます。ここに「官渡の戦い」が幕を上げます。

(本文抄)

袁紹の参謀・審配は「十万の軍を官渡にあつめ、曹操の本陣の前に土山を築き、上から敵の陣に矢を射かけるのがよろしいでしょう」

袁紹はこの提案に従い、いっせいに曹操の本陣の前で、土を盛り、山を作らせた。土山の上に高い櫓を立てると、弩や弓の射手をそれぞれの櫓に配置して、山上から矢を射かけさせた。曹操軍は恐れ慌てて、盾を頭にして這いつくばった。

一方、曹操の参謀・劉曄は、「発石車を作つて、これを打ち破るのがよいと思います」

そこで、数百台の発石車を作らせ、石の弾丸を櫓をめがけて打ち込ませると、身を隠す場所もなく、死んだ者は数えきれないほどだった。袁紹軍ではその車を「霹靂車」と呼んで恐れ、櫓にのぼるものがなくなつた。

審配はまた計略を考え、曹操の陣まで地下道を掘つて攻めた。これに対し劉曄は、長い塹壕を掘つて、地下道を役にたたなくした。

曹操は二か月間官渡を守りつづけたが、兵士は疲労し、食糧は底をついたため、許昌にもどりたいと思うようになった。手紙を書いて許昌の荀彧に意見を求めた。

荀彧は、「袁紹は全軍を官渡に集め、勝負を決しようとしております。殿は弱勢をもつて袁紹の強勢にあたつておられます。勝利を得られないときは、必ず敵につけこまれてしまいます。今こそ天下を決する大事な時です。」

現在、食糧が乏しいとはいえ、敵の前進をくい止めておられれば、勢いがきわまるところ、必ず異変がおこるにちがいありません。そこが奇策を用いる時であり、断じてこの機を逸してはなりません」

曹操は手紙を見て、將兵に力を尽くして死守せよと命じた。

(※この間、曹操は荀攸の進言に従って、袁紹軍の輸送隊を攻撃させ、数千台の穀物輸送車を焼き払ったが、曹操軍の食糧不足も深刻な状態となっていた。また、袁紹側も曹操軍の妨害があり、食糧補給に難を生じ始める。)

袁紹の参謀・審配は、「軍隊を動かすには、食糧が欠かせません。烏巢はわが軍の食糧を貯蔵している拠点ですから、大軍で守ることが必要です」

袁紹は大将の淳于瓊に、烏巢を守備せよと命じた。

(解説)

「白馬の戦い」の後、曹操と袁紹は官渡で対峙たいじしますが、戦いが長引くと曹操軍は食糧不足に陥ります。曹操は、根拠地の許昌きょしょうの留守を守っている荀彧けんぎに手紙を書き、意見を求めます。荀彧は、ここで叩たたかなければ必ずやられてしまいますと、踏みとどまるよう主張し、曹操はこの言葉に従って、官渡に踏みとどまることを決意します。こうして対峙たいじすること数カ月、曹操にとって千載一遇せんざいいちぐうの好機がやってきます。

(本文)

ついに曹操は食糧が底をついたため、許都きよとから輸送させようとして使者を送った。しかし使者は途中、袁紹軍に捕まり、参謀さんぼうの許攸きょけいの前に引き出された。許攸は若いころ、曹操の友人だったが、今は袁紹の参謀になっていた。

許攸は使者の手紙を見ると、ただちに袁紹に「今、曹操の食糧まぐさや秣まぐさはすでに底をついておりませす。この機会に乗じ、すぐに許昌を攻撃すべきです」と進言した。

しかし袁紹は、それを退ける。

「曹操は詭計きけいの多いやつだ。この手紙もわれらを誘いいだすための罠わなだ」

許攸、「今の機会をのがして攻めなければ、あとで悔くややんでも仕方ありませんぞ」

話し合っている最中、鄴郡ぎやうぐんから使者がやつて来て、手紙をわたした。

その手紙には、許攸が冀州きしゅうにいたころ、賄賂わいろを取り金銭や穀物こくもつを自分の物にしていたと書かれてあった。

袁紹は激怒して言った。

「どの面つらさげて、わしの前で献策けんさくなどするのか。おまえは曹操から賄賂を受け取り、わしをだまそうとしているのだらう。打ち首にするところだが、命だけは助けてやる。とつとと失うせろ」

許攸は天を仰いで嘆息たんそくし、曹操のもとに身を寄せることにした。ひそかに曹操の陣に向かうと、途中、曹操軍の兵士へいしに捕つかまった。

許攸は、「私は曹丞相じょうしょうの友人だ。南陽なんようの許攸が会いに来たと知らせて来い」

曹操は、許攸が脱走して来たと聞かや、履くつもはかず、裸足はだしで迎えに出た。

許攸の姿を見るや、手を叩たたき喜んで笑いながら、手をとって陣営のなかに案内した。

曹操が先に地面ぢめんに跪ひざまずき拝礼はいらいしたので、許攸は慌あわてて助け起こしながら言った。

「殿は漢の丞相、私は無位無官の身です。どうしてそんなにへりくだられるのですか」

「貴公とわしは昔馴染みだ。官位や爵位しやくゐによる上下などあるものか」と曹操。

「私は人を見る目がなく、袁紹に従う羽目はめになりましたが、進言しても聞き入れられず、見限むかしなじつて昔馴染みのもとにやつて来ました。どうか私を配下に加えていただきたい」と許攸。

「子遠しえん(許攸の字) どのが来てくれれば、わが事成なれりだ。どうかわしに袁紹を打ち破る計略を教えてもらいたい」と曹操。

(解説)

許攸は自分の意見が採用されないのを恨み、袁紹に見切りをつけて曹操のもとに寝返ってきます。曹操は裸足はだしのまま飛び出し、手をたいて許攸を迎え入れ、しかも地面に跪ひざまずき拝礼ひざまずまでします。どこまでが本気で、どこまでが演技かわからない見事な曹操の役者ぶりです。このあとの曹操と許攸の腹の探り合いが面白く、まさに二人の名演技です。

(本文)

「殿には、今、どれくらい食糧が残っていますか」と許攸は聞いた。

「一年は支えられるだろう」と曹操。

「そんなことはありえないでしょう」と許攸は笑った。

すると、「半年は大丈夫だ」と曹操。

許攸は立ち上がり、小走りして陣幕の外へ出るふうをよそおい、

「わたしは真心から参りましたのに、殿がそんなふうに嘘をつかれるとは、心得違こころあやまちいをして
いました」

曹操が引き留めて、「子遠しえん、許してくれ。ほんとうのことを言おう。軍中の食糧は実は三
か月分しかないのだ」と言うと、「世間の者はみな孟徳もうとく（曹操の字）は奸雄かんゆうだと言いますが、
なるほどその通りでございませぬ」と許攸は笑った。

『兵は詐まがを厭いとわず（戦いに嘘うそはつきもの）』と言うではないか」と曹操も笑った。

そこで、許攸の耳元で声を低めて言うことには、

「軍中には今月分の食糧しかないのだ」

「私を騙だましてはなりません。食糧はもはや底をついています」と許攸は大声で言った。

曹操は愕然がくぜんとして聞いた。

「どうして知っているのか」

許攸はそこで曹操が書いた手紙を取り出し、
「この手紙はどなたが書かれたものですかな」

曹操は驚いて聞いた。

「どこで手に入れたのか」

許攸が使者を捕えた一部始終を告げると、曹操は許攸の手を取って言った。

「子遠しえんどの、昔の誼よしみで来てくれたからには、どうかわしに策をきょうじご教示ください」

「私の策によれば、袁紹の軍勢を戦わずして自滅させることができます。お聞きくださいますか」と許攸。

「ぜひとも聞かせてもらいたい」と曹操。

「袁紹は食糧をことごとく烏巢うそうに備蓄びちくし、今、淳于瓊じゆんぐけいが守備に当たっています。しかし、彼は酒におぼれて何の備えもしていません。殿には、精銳の兵を選び、隙をついて食糧を焼いてしまえば、袁紹軍は大混乱に陥るでしょう」

これを聞いて曹操は大いに喜び、みずから烏巢を攻め、食糧を奪う準備を整えた。

張遼ちやうりやうが言った。

「袁紹が食糧を備蓄しているところですから、備えがないはずはありません。許攸のいうこ

とは疑うべきです」

「いや、そうではない。許攸がここに来たのは、天が袁紹を敗北させるということだ。今、わが軍は食糧が尽き、長く持ちこたえることはできない。許攸の策を用いなければ、座して死を待つようなものだ。このたびの襲撃は、どうあつてもやるつもりだ」と曹操。

そして、曹操みずから諸将を率いて、袁紹軍の旗印を立て、兵士はみな枯草や薪を背負い、人は枚ばい（声を立てないために口にくわえる木片）をくわえ、馬は口をしばり、烏巢めざして出発した。この夜は満天の星空だった。

烏巢うそうに到着したのは、すでに四更（午前一時から午前三時の間）も過ぎるころだった。曹操は兵士たちに命じて、周りから火をかけ、軍鼓を鳴らし鬨こゑの声をあげて突入した。

そのとき、淳于瓊は、帳とばりのなかで酔っぱらって眠っていたが、慌てて飛び起きた。

「何事だ」と言いおわらないうちに、熊手くまで（先のまがった棒）に引っかけられ、仰向けにひっくりかえた。淳于瓊は生け捕りになって、曹操の前に引き出された。

曹操は、みせしめにその耳・鼻・指を斬り落とさせ、馬にくくりつけて袁紹の本陣に送り返した。

(解説)

寝返った許攸は、袁紹軍が兵糧を烏巢に備蓄していることを教えます。曹操はみずから精銳部隊を率いて夜襲をかけました。袁紹は北の方角で火炎が立ちのぼっているとの知らせを受け、烏巢で緊急事態がおこつたと察知します。

(本文)

張郃は袁紹に、「私が高覽とともに救援に向かいます」

いっぽう参謀の郭図は、「必ず曹操みずから出陣しているに相違ありません。曹操が出撃した以上、本陣はがらあきです。まず曹操の本陣に攻撃をかけるべきです」

張郃は、「曹操は計略に富んでいますから、外に出るときは、必ず内側の守りを固め、不測の事態に備えているでしょう。もし曹操の本陣を攻め落すことができなかつたなら、淳于瓊らは生け捕りにされ、われらもみな虜にされてしまいます」

郭図は、「曹操はひたすら食糧を奪い取ろうとしているのです。本陣に兵を残しておくはずがありません」と繰り返し、曹操の本陣を攻めるよう勧めた。

そこで袁紹は、張郃と高覽に曹操の本陣を攻撃させるとともに、一方で蔣奇を烏巢の救

援に向かわせた。

さて、曹操は淳于瓊配下の衣服・鎧・旗印を奪い取って、敗軍が本陣にもどる体を装い、途中、蔣奇軍に誰何されると、烏巢から逃げもどるところだと答えたので、蔣奇はまったく疑わず、そのまま張遼にばっさり斬られて馬から転がり落ちてしまった。

そこで、曹操はまた袁紹のもとに人をやり、「蔣奇はすでに烏巢の敵兵を蹴散らしました」と偽りの報告をさせた。このため袁紹は、烏巢へは援軍を送らず、官渡へ向かう軍勢を増やすことに専念した。

一方、張郃と高覽は曹操の本陣に攻め寄せたが、大敗を喫した。救援の軍勢が到着するころ、曹操もまた背後から攻めかかったので、張郃と高覽は、辛うじて脱出したのだった。

郭図は、張郃と高覽が帰還し、自分の計略の失敗が明らかになることを恐れ、先手を打って袁紹に彼らを譏って言った。

「あの二人はもともと曹操に降伏しようという気があります。だから、曹操の本陣を攻めるにあたって、わざと力を抜いて、兵力を消耗させたのです」

袁紹は腹を立てて、急いで二人を呼びつけ刑に服させようとした。

郭図はこれに先立って人をやり、「殿はおまえたちを殺そうとしておられる」と二人に告

げさせておいた。

袁紹の使者が到着すると、高覽はたずねた。

「殿がわれらをお呼びになるのは、何のためだ」

「理由は存じません」と使者。

すると高覽は剣を抜くなり、使者を斬り殺した。張郃ちやうしやうが仰天したところ、高覽は言った。

「袁紹は讒言ざんげんを信じる人物だ。われらは座して死を待つより、曹操に降伏したほうがましだ」

「私も以前からそうしたいと思っていた」と張郃。

そこで二人は曹操の本陣に向いて投降した。

曹操は「恩愛をもって遇したならば、たとえ二心を抱いていたとしても、その気持ちを変
えることができよう」と言い、二人を中へ招じ入れた。二人は戈ほこを倒し、甲かぶとをぬいで、地
面に平伏した。

曹操は、「袁紹もきみたちの言葉を聞いていれば、敗れはしなかつただろう」といい、二
人を手厚くもてなした。

その夜、曹操軍は袁紹の本陣に夜襲をかけた。敵味方入り乱れて夜明けまで戦い、それぞ
れ兵をまとめてみると、袁紹軍は半分以上の兵力を失っていた。

袁紹軍はみな戦意を喪失し、散り散りになって逃亡したので、大敗北を喫した。

(解説)

自ら先頭に立つて奇襲に成功した曹操に対し、袁紹はここでも決断ができません。

部将の張郃は烏巢の救援を主張しますが、参謀の郭図は曹操の本陣を攻めるよう進言します。そこで袁紹は、張郃と高覽に曹操の本陣を攻撃させる一方で、蔣奇を烏巢の救援に向かわせるといふ、中途半端な手を打ちます。

曹操の奇襲は成功し、烏巢の救援に向かった蔣奇は打ち取られてしまいます。また曹操の本陣を攻めた張郃と高覽も負けてしまいます。そこで郭図は、自分の失敗を張郃と高覽のせいにして讒言ざんげんしたので、張郃と高覽は曹操に投降してしまいます。

袁紹の参謀のなかでも田豊でんぽうと沮授そしゅは、戦況を把握して的確な提案をしますが、袁紹はついにその意見に耳を傾けることはありませんでした。

(本文)

袁紹の残していった書物のなかから、一束ひとつかいの手紙が出てきた。これらはすべて許都や曹操

の軍中の者が袁紹に内通ないつうして送ったものだった。

左右の者は、「ひとつひとつ姓名を調べ上げ、死罪にするべきです」と言った。

しかし、曹操は「袁紹が強大だったときには、この自分すら勝てる自信がなかった。まして他の者がそう思うのも無理のないことだ」と言い、手紙をことごとく燃やさせ、二度と口にしなかった。

沮授は捕らえられて、曹操の前に引き出された。曹操はもともと沮授と知り合いだったが、沮授は曹操の顔を見ると大声で叫んだ。

「私は降伏しないぞ」

曹操、「袁紹は浅はかな人間で、きみの意見を用いなかった。私がもう少し早く、あなたの力を得られたならば、天下に事はおこらなかつただろう」

しかし、沮授は馬を盗んで、袁紹のもとに逃げ帰ろうとしたので、曹操は怒って殺させたが、沮授は死に至るまで顔色一つ変えなかつた。

曹操が嘆息たんそくして言うには、「ああ、わしはまちがって忠義の士を殺してしまった」

そこで手厚くもがり殯ひつぎ（埋葬する前に亡骸を柩におさめ安置すること）をおこなったあと埋葬し、墓碑ぼひに「忠烈沮君の墓」と刻ませた。

袁紹は大いに後悔こうかいした。

「わしが田豊の意見を聞かなかつたばかりに、帰つても、彼に合わせる顔がない」

逢紀ほうきは田豊を譏そしつて言つた、

「田豊は殿が敗北なさつたと聞くと、大笑いし、『それみろ、私の言つたとおりだ』と申し
たそうです」

袁紹は激怒して、「わしを笑うとは、ただではすまさんぞ」と言い、使者ひとあしに冀州きしゅうの獄ごくに向かい田豊を殺すよう命じた。

田豊が獄中にいたところ、獄吏ごくりが言つた。

「おめでとうございます」

「何がめでたいのか」と田豊。

「袁將軍は大敗して帰られますので、必ずあなたを重用ちようようなさると存じます」と獄吏。

「私は死ぬだろう」と田豊。

「どうして死ぬなどとおっしゃるのですか」と獄吏。

「袁將軍は表向きこそ寛容だが、内心は嫉妬しつと深く、臣下のことを思いやらない人だ。もし勝

利して喜んでおられたならば、私を放免ほうめんすることもありうるが、敗北して恥ちずかしい思いにかられた以上、もう私に生きる望みはない」と田豊。

獄吏はまさかと思っていたが、そこへ突然、使者がやって来て、袁紹の命令を伝え、田豊の首を取ろうとしたので、仰天した。

田豊が、「私には最初から必ず死ぬと分かっていた」と言うと、獄吏たちはみな涙を流した。

田豊は、「大丈夫だいじょうぶ(りっぱな一人前の男)として天地の間に生まれながら、主君たるべき人を見分けることができずに仕えてしまうとは、自分の無知というほかない。今、殺されても惜しむことはない」と言うと、獄中でみずから首を刎はねた。

(解説)

戦いが終わって、袁紹が残していった地図や書類の中から袁紹に内通していた者の手紙がでてきますが、それをすべて焼き捨てて不問ふもんに付します。

また曹操は、袁紹の参謀の沮授そじゅに、協力して天下の騷乱をおさめてくれといいますが、沮授は袁紹のもとに逃げ帰ろうとしたので殺されます。

一方、袁紹によって獄につながれていた田豊は、袁紹の人となりじんぶちを熟知じゆくちしていて、わしはきつと殺されるだろうといえます。そのとおりに、袁紹は田豊を殺すよう命じます。

こんな人物を主君としたのは、田豊の悲劇でした。しかし、田豊はそうした人物を主君として選んだのは自分の責任だと、従容じゆうようとして自刎じふんしたのでした。

『三国志演義』は、曹操と袁紹の対照的な姿を描きます。

猜疑さいぎしん心が強く、胸襟きょうきんを開いて広く意見を聞くことができない袁紹。こんな状態では、滅亡めい亡してしまうのは当然でしよう。

曹操の謀臣じゆんいん荀彧は、「度・謀・武・徳」の四点にわたり曹操と袁紹を比較しています。

袁紹と曹操の対立がまだ決定的になる前のことですが、荀彧は曹操を励まして次のように言います。

袁紹は、外は寛大にみえるが内心は猜疑さいぎしん心が強く、人に仕事をまかせておきながら、その心を疑うような人物です。これに対し、公は聡明にして他のことに拘泥こういされることなく、ただ適材適所だけを心がけておられます。これは度量（度）のまさっている点です。

袁紹は鈍重で決断に乏しく、機会を見すごす欠点があります。これに対し、公は大事を決断することがおできになり、変化に対して自在に対応されます。これは計略（謀）のまさつ

ている点です。

袁紹の軍の統率ぶりはしまりがなく、軍法軍令は実施されておりません。兵卒の数は多くとも、実際には使いこなせないでおります。これに対し、公の軍法軍令は明白であるうえに、賞罰しょうばつもきちんと実行されております。兵卒の数は少なくとも、みな先を争って生命を投げ出します。これは武力（武）のまさっている点です。

袁紹は先祖のつちかかってきたもてで寄りかかり、もつともらしい態度で知恵者のふりをし、それで名声を集めております。そのために、能力に乏しく議論好きの人間が多く彼に身を寄せているのです。これに対し、公はこのうえない仁愛をもつて人々を扱われ、誠実な態度をとられ、表面だけきれいに取りつくろうことはなさらず、ご自分の行動は謹直きんちよくせつけん節儉でありながら、功績のある者に対しては物惜しみものおをなさいません。そのために、天下の忠誠をささげ実務に貢献する人物は、みな公のためにお役に立ちたいと願っているのです。これは徳義（徳）のまさっている点です。『三国志』荀彧伝、井波律子・今鷹真訳、ちくま学芸文庫）

この四点をわかりやすく、「リーダーの人間の度量、戦略構想、集団の士気、功績主義」といいかえる方もあります（『三国志Ⅱ覇者の行動学』和田武司・大石智良訳、徳間書店）。

ともあれ、旧勢力の代表ともいえるべき保守的な袁紹に対し、曹操には新しい時代を自分の手で拓ひらいてみせるといふ強い意志が感じられます。

陳寿はその評で、こう書いて「袁紹伝」をしめくります。

「昔、項羽こううは軍師の范增はんぞうの言葉に耳をかさずに、中国統一の王業おうぎようを失った。しかし、その項羽でも范増を殺すようなことはしなかった。袁紹は田豊の進言に耳をかさないばかりか、殺すようなことまでした。その愚かさは項羽より甚はなはだしい」